



いま全道各地の河川では、川を活かした学習活動やまちづくり活動などさまざまな分野で、行政とも連携しながら多くの市民団体が活動しています。地域でこうした活動を実践している方々に、「川と人づくり、まちづくり」をテーマにお話していただき、これからの川づくりにつなげていきます。

川が育む人間力



千葉 よう子氏

NPO 法人帯広 NP028 サポートセンター理事長

インタビュー

真砂 徳子氏

フリーアナウンサー

真砂 千葉よう子さんは、幼稚園教諭時代、年長組を対象としたサケの稚魚のふ化・飼育・放流等の実践や河川敷のあそび場、空間づくりなど地域や現場で、いろいろな活動に関われ、「子供にとって川は生きた教材。川の姿や環境を知ること、その土地の風土や文化を知ることにつながり、さらには水と関わることで生きる力が備わることになる」という考えで活動されているとお聞きしています。今日は、これまでの活動とこの「人が生きる力—人間力」向上に果たす川の役割などについておうかがいしていきます。

「水が生命を育む」から市民活動へ

真砂 千葉さんは、十勝管内の特定非営利活動法人への活動支援やまちづくりの推進活動を行う「帯広NPO28サポートセンター」を平成10年11月に立ち上げ、現在、2代目の理事長をされていますが、こうした市民活動に関われるようになったきっかけはなんだったのでしょうか。

千葉 私の子供は男の子3人ですが、一番下の子が母乳を小腸から吸収しない病気になり、北大病院に入院、2年ほど札幌で生活しました。そのと

きの経験から、一つしかない命の育み方・水と命の関連を少し勉強させていただいたのがきっかけです。

高校を出て、父親の建設会社で13年働いた後、短期大学の幼児教育科に学び、音更町の渡辺幼稚園（現共栄台幼稚園）に就職しました。その当時、園には共通認識としての目指すべき「子ども像」がありませんでしたので、新米副園長でしたが、「生きる力を持った、たくましい子どもをめざして」という「子ども像」を提案いたしました。昭和60年のことです。園の子供たちはもちろんのこと、地域の子供たちにも健やかに、たくましく育ってほしいとの願いから、地域連携が必要と気づき、帯広サケの会や音更川グランドワーク等々の市民活動への参加が始まりました。

そして、子供たちを水と親しませるためのカリキュラム作りや取組みを始めたわけです。多分北海道ではプールで子供たちを遊ばせるのは夏、2カ月間あるかないかです。私は、それでは、心身の発達や社会性、安全教育は不十分だと考え、プールを通年で使うことを提案しました。幸い関係者



の理解が得られ、3才児から6才児までの利用が実現しました。4月から翌年2月まで約1年間毎週プールを使つての気づ

かせ教育は、もう20年近くになります。水は体だけでなく確かに心を育てます。例えば、知的障害のある子供たちも水に入ると心が安定していきます。水がもつ教育の切り口というのでしょうか。不思議な力、役割を感じます。私は泳ぎは得意ではありませんが、水がヒト科のヒトを育てる魅力に気づき、私なりの研さんというのもおこがましいですが、努力を重ねてきました。

1級水系には大小200あまりの支川がありますから、当時の保育の現場では、夏休みの前には必ず「良い子は川に行きませんよ。プールとは違いますよ。どこが?」「1人で川に行つてはいけないの?」等と、どうして危ないのかということを話し合っていました。

また、水が育てる命の循環を伝承するためにサケを育て、卒園記念に放流していました。

サケの卵はふ化すると、かわいらしいしっほが^{※1}出て、お腹にはオレンジのさいのう^{※1}をつけて泳ぎます。子供たちには「大きくなるためにお母さんからもらったご飯、栄養だよ」「先生はいないのに、大きくなったらみんなで川から海に行くんだって」「途中で大きな魚に食べられてしまうかもしれないので、頑張つて帰ってくるようにごあいさつして」と話していました。

サケの稚魚も自分の命は自分で守ります。稚魚を育てていて、大変感動したことがあります。今でもその瞬間を思い出します。「赤ちゃんが最初に歩くのは上手ではありませんが、魚も最初は泳ぐのが上手ではない」と分かつて、びっくりしました。そして、「川にはこういった私たちの知らないドラマがあることに気づきました。やはり、川に出なければとそのとき強く思いました。

真砂 実際に、見てみなければわからないことですよね。

川文化の活動からNPO設立へ

千葉 帯広NPO28サポートセンター立ち上げの

きっかけは、私たちのそれまでの活動とNPO法案の目的がほぼ一致していることでした。

また、川の恵みを受けて人間が生きてきた歴史を「川文化」として、次の世代につなげたい。つなげていかなければならないとの勘が働きました。それで、運動論として実践できるのであればとの思いから、NPOの設立となりました。また、川文化を支えるボランティアの学校もやりたいなと思っていました。

真砂 「川文化」の活動をされていたのが、NPO法案の成立で活動がさらに広がったのですね。とはいえ、活動を続けていくのは簡単なことではないと思いますが、ご苦労はありましたか。

千葉 最初の3年間は勤務しながらですから、私自身は大変でした。金銭的には問題はありませんでしたが、ただ忙しかったです。ここ2、3年の課題は夏季に集中する活動スタッフ不足でしょうか。

真砂 苦労を感じないぐらいの夢や大きな目標があったからなのでしょうね。

父母から引き継いだもの

千葉 父は建設会社を経営していましたが、山や川に詳しく、どんな生き物にも生まれ変わるのではないかというぐらいに、自然に興味、関心を強く持っているようでした。いろんな生き物と出会わせてくれたのは父です。

真砂 そういった子供時代の体験を、今の子供たちに分けてあげるのが、千葉さんの夢?

千葉 そうですね。

真砂 世界の四大文明も確かに川のそばで生まれていますよね。そういえば、以前、「水道が発明されてから、人間はどんどん川から遠ざかってしまった」という話を聞いたことがあります。人間は川の水で生かされている生き物なのですね。文明の発達で川から遠ざかり、川はまったく生活圏とは別物のような感覚に陥っていましたが、本当は川のすごく近くで生きているのですね。

千葉 そこのところをみんなが考えればいろんな問題を解決できると思いますが、やっぱり人間は弱い生き物で、できるだけ楽をしたくて文明に流されやすい生き物なのでしょうね。

真砂 今のお話で、NPOの夢が、自然と一体となって生活していた子供のころの経験を子供たちに引き継ぎたいという思いだということが伝わってきました。そのほかにはどんな夢をお持ちで

※1 さいのう（臍嚢）：ふ化したての幼魚の腹にある袋。幼魚は自分でえさがとれるようになるまで、袋の中の栄養分を吸収して成長する。

すか。

千葉 もともと、母は文具店や雑貨店、銭湯等を経営し、沢山の人にお世話になってきましたから、60代から「ボランティアをしたい」と言っていましたし、父もまた北電の下請けでしたが、いろいろな障害者施設でスロープ等をボランティアで作っていました。両親は一生懸命働きながら、自分のできることを少しでも社会に還元していくという考えが普通でしたので、私も当然として受け止めていました。現在では、父が残してくれた大きな建物（ハード）と、母の知恵（ソフト）に支えられて、その自分の思いがかなえられていることを付け加えたいです。

言葉で伝わらない感覚を母なる川で磨く

千葉 一つしかない命の守り方、育て方について伝えることを川で行う理由は、歴史的に考えても人間は長い間、川辺で生活していた生き物であること、そして「人間は歩く海」ともいわれますが、女性の羊水の中で命が育つことなどを考えると、すべての川を「母なる川」と言っていることを私なりに納得しています。例えば、Eボート^{※2}で川に入ると、子供たちは楽しさと危険を体で感じます。魚のようにえらががないので、落ちたとき川



の中で呼吸はできないと改めて気づかされたとき、例えば仲のよくない子供同士でも、息

を合わせ、パドルを合わせ、声をかけ、さりげなく気配りしている姿をよく見かけます。言葉だけでは伝わらない川の姿を見ること、親しむことで、川での危機管理能力の育みのねらいがまさにそこにあります。普段は危険な体験の少ない生活の中

では、意識がいつも安全なままです。本当に「危ない」体感をして初めてその感情は言葉では伝わらない貴重な経験につながります。「母なる川」は見守りも含めて文字どおり、さまざまな顔で「人間を育てる川」だから「母なる川」ということでそこにたどり着いてしまうのでしょうか。

真砂 川で子供たちが遊ぶと、家の中では眠っている本来の五感が活躍するのでしょうか。

千葉 年齢が低ければ低いほど水との関わりが受け入れやすい。園児が活動していたプールのママさん教室で見ましたが、生後半年の赤ちゃんをプールに入れると、ずっと沈んで浮かんできます。赤ちゃんはごく自然体で、居心地良さそうにしています。人間だけで作った脳の働きでは、動物の本能をあまりにも押し隠し、五感が育ちにくい現状にあります。

川は「生きる力」を与える

真砂 生きる力を学ぶために川を教育の現場としてお選びになった千葉さんが考える「生きる力」というのは、どんなことですか。

千葉 「生きる力」というのは、例えば1歳、2歳でも、その発達年齢に見合った体験を経験として生かしていく力です。

真砂 体験なくしては考えられないことですね。

千葉 そうですね。川での体感、体験は自分のためだけに生かすものではなく、引き継いでいく大切な学びであり、大げさかもしれませんが、勝手に生涯学習の一つと考えています。なぜなら、人間という袋の中に水が7割も入って私たちは生かされているのですから。

真砂 自然のフィールドは川だけではなく、山も海もありますね。川に重点を置くのはなぜですか。

千葉 先ほどの理由のほかに、人間は予知能力を持っているのに磨くチャンスをしばし忘れていたように思います。川は日常的にそのチャンスを与えてくれます。ほかの活動に比べて危険度は高いですが、その分危険度の高さを地域の人や環境で学べるのであれば、それは人間生活の知恵のベースにつながると思います。川も生きていますから川とよく対話することで、生きる力や知恵、危険回避の方法は川が教えてくれているのだと感じています。川を選ぶことは学ぶメリットが多く、川のフィールド関わることで人間の心身の成長の道筋がわかりやすく見えるのも私の興味、関心の引くところでしょうか。

※2 Eボートは、川やダム湖などの水辺で人々が交流（Exchange）することで、水辺や流域の環境（Environment）を見直すきっかけを作り、エコライフ（Eco-life）を促進させるための新しい道具として考案された。いわば、川体験の入門編・入り口（Entrance）となるボート。子どもからお年寄りまで誰もが（Everybody）、簡単に（Easy）、楽しく（Enjoy）、水辺の素晴らしさを体験（Experience）することができる。また、最近では環境教育（Education）を目的とした活用や、水害や水辺の事故などの緊急時対応（Emergency）を身につけるためにも使われている。



真砂 危険度が高いと、今の生活状況とまったく違って、逆に工夫してうまく生きる知恵もわいてくるというのですね。最近、自然の中で子供たちを遊ばせよう

という試みが増えてきていると感じます。これから母になりたいと思っている身としては、今日は千葉さんにお話をうかがって、子育てや教育について事前にしっかり勉強しておこうと思い、張り切って来たんです。千葉さんは平成16年4月に帯広市にオープンした「北海道エールセンター^{※3}」の運営管理もされていますね。千葉さんの教育に対する芽生えから始まった活動が、今、どんどん広がってきていらっしゃるんですね。

千葉 理解者が増えてきたのは大変うれしい。一番増えてほしいのは、お子さんを産んだ若いお母さんたちの参加です。一緒に活動することで、川で遊ぶよき理解者となってもらえるからです。

現代教育では、小学校3年生以上の子供のほとんどが塾に行くのが普通になっていて、塾と学校の勉強の二本立てです。「頭がよければいい」となっています。ところが、ある年齢が来ると、心身共に健康でない人間になり、人間の特徴を生かせないヒトに意識が変わることがあります。幼児期から五感を磨いていないと、高齢化社会に入ったところにはそれらを生かすことができなく、何も考えられなくなる人が増えていくと思われます。精神的にも、生理的にも、使っていないところの能力はどんどん落ちてきます。いつもきちっと使っている能力でさえもおかされるという脳の仕組みには勝てません。すべての人間は、自然と対話して生きる動物なのでしょうね。

行政と民間のパートナーシップ

真砂 そのような考えが広がって、行政と民間のパートナーシップが生まれてきていますね。

千葉 そうですね。こうした活動は行政と民間のパートナーシップなしでは継続できません。今、

※3 北海道エールセンター：文部省、国土交通省、環境省の三省が推進する「『子供の水辺』再発見プロジェクト」の推進に向け、日本で初めての試みとして、平成16年4月に帯広市に設置された地域センター「子どもの水辺北海道地域拠点センター」としての機能とあわせ、高齢者や障がい者、地域住民の健康を促進する「健康の駅支援センター」、地域コミュニティの形成を推進する「川の駅支援センター」としての役割も持つ。



北海道エールセンター

活動できるのは、行政や財団の方々が後押ししてくださっているからです。私たちが描いたいろいろな夢も、行政に信頼していただけて初めて形になっているのです。ただ、行政にお願いしたいのは、たとえ細かなことでも必要だと思われる糸は切らないでほしいということです。ゆっくりと張ったクモの巣のように、最初は点で始まり、線になり、やがて面になっていくように、時間がかかります。各地域で立体的になるには、さらなる意識の改革が必要だと考えます。長い目で見守っていただけることを願っています。

また、スタッフについては教育関係者が7割ぐらいを占めていますが、地域の皆さんは人生の何かしらの先輩ばかりです。このNPOでヘルパー資格を取られた方も活動していただいています。年齢が違い、視点が違ういろいろな方々がいて、エールセンターの一つの形になっているのでしょうね。皆さんこの活動に意義を感じている方ばかりです。

真砂 幅広い年齢層の皆さん方の交流がそこでさらに広がってきているのですね。それは、千葉さんが想像もしていなかった広がりですか。

千葉 そうですね。地道な活動ですね。地域の一人ひとりが自分にできることがないだろうかと、それを生かすボランティアを社会に位置づけたのが特定非営利活動法人制度の力なのでないでしょうか。

真砂 社会の情勢がそのような方向に動いてきているということなのですね。

川の体験者を増加させたい

真砂 活動が続ける中で困ったことは？

千葉 困ることが分かるのに3年ぐらひはかかりました。ボランティアの延長線上であるNPO。しかし、エールセンターはボランティア的な気持ちだけではできません。企業と同じように、いい

仕事をしなければなりません。モデルがありませんから、それこそ知るべきこと、勉強しなければならないことが山ほどあります。経費の面で余裕がないと、新たな工夫や知恵が必要になります。ですから、本当に次の世代にこの体験を必要だと思って伝えていく意識や意義があって、初めて活動の意味が出てくる。しかし、「それっていいね」「いいことしているね」と言ってくれる人はたくさんいますが、「では、私が責任をもってやりましょう」と言う人は思っていたよりは少ないです。

川のレンジャーはいますが、皆さん昼間は自分の仕事があり、なかなか活動に参加できないのが実態です。スタッフを増やすのも大きな課題です。定年になった方や家庭におられる女性の協力が大事です。さらにお母さん人口が増えると、それぞれ地域の教育力のアップにつながり、運動論としては、楽しくなると期待しています。

声をかけていかないかぎり、川は歴史的な背景から危険ということで、川を利用するのは一部の人が、しかもレジャー色が濃く、得意な人のみが楽しむということになってしまうのです。

真砂 川を体験する人を増やすしかないのでしょうね。

千葉 日本人はお祭りが好きですから、例えば地元の行政と民間の方々がEボートに乗ってみんなで川祭りをする。熱くなったら、みんなで川に入って、川と対話する。そういうことしかないでしょうか（笑）。

真砂 確かに楽しさを知ると自然がおもしろくなりますよね。私も仕事で体験しなければ、一生カヌーなんか乗りませんでしたから。

川づくりへの要望

真砂 実際に活動している中で、川づくりについて何か注文のようなものはありますか。

千葉 護岸のところは、場所によってはズルッと滑り落ちやすいところが目立ちます。子供同士で川に行ったのでは危険です。

真砂 護岸工事とかは治水のために絶対大事なことです。川を体験するという意味では工夫しなければならない面もあるのですね。

千葉 そうですね。ハードなものは、環境や時代の変化で違う機能が求められる場合がありますが、その地域に合ったものに、また生き物に合ったものにしながら、自分たちでも育てられる川づくりが大事かと思います。

川の楽しさをもっと広めたい

真砂 最後に、今後の活動方向をうかがえますか。

千葉 北海道エールセンターの本来の役割を主軸にしながら、微力ですが全道支援を行います。具体的には、幼児から



高齢者まで、もちろん障害を持っている方々にも支援させていただきたいですね。生きる力を育む教育は、川のフィールドが一番です。そういう気持ちは今も変わりません。

話は変わりますが、NPO設立と同時にグループホームを立ち上げました。母が保証人で、私が借金しました。親子で地域貢献のためにお金を借りて来るのは珍しい、と銀行で笑われました。「行政の支援を受ければ4年で返せるが、そうでないと15年かかる」と言われ、私は15年を選びました。あと8年ありますが、社会の実態、自分の成長を見ながら支払うのも悪くはないと思っています。そのうち、昔、川で遊んでいた高齢者の方々にも、その体感、感触を回想させてみたいですね。

真砂 私たちが考える価値とはまったく違うところにいろいろなものを含めて価値を感じていただけるのですね。

そういえば、小さいときに、おじいちゃん、おばあちゃんに昔の遊びを教わった記憶が私にはあります。いまは核家族で一緒に住むことが少ないですから、グループホームのおじいちゃん、おばあちゃんたちが子供たちと一緒に川遊びすることができたら、とてもよい体験なのではと思うのですが。

千葉 できたら最高ですね。

真砂 深いお話をうかがえて、本当に勉強になりました。ありがとうございました。

（本インタビューは、平成18年9月4日に帯広NPO28サポートセンターで行いました）

profile

千葉 よう子 ちばようこ

1947年池田町生まれ。'65年高校卒業後、父親の経営する建設会社に就職、'79年近畿大学豊岡女子短期大学幼児教育科卒業、同年学校法人渡辺幼稚園（昭和56年学校法人共栄台幼稚園に改名）に就職、2001年3月退職。同年4月特定非営利法人帯広NPO28サロンに入社 '04年4月NPO法人帯広NPO28サポートセンターに改名、'05年理事長に就任、現在に至る。

真砂 徳子 まさごのりこ

埼玉県出身。明治大学文学部卒。新潟テレビ21アナウンサーを経て、北海道に移住。ニュース、バラエティ、情報・教養番組などテレビを中心に幅広く活躍。2005年独立し、真砂事務所を開設。